

長野県革新懇ニュース

2023年5月号
発行日5月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 00510-3-15971



発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 井上和行さんインタビュー
- 2面 1面続き、「近現代信州の歴史回廊」関秀雄さん
- 3面 辺野古基地建設に抗議
読者の声、漢字パズル
- 4面 雨よ降れ AI「小説」の登場 窪島誠一郎さん
青い目の人形① 北原高子さん
映画評論『生きる LIVING』 内山到さん

長野県革新懇

検索



1945年滋賀県甲賀市生まれ。64年京都大学理学部数学科入学、68年大阪大学大学院理学研究科入学。1971年信州大学理学部入職。2003年6月～05年6月信州大学副学長。2011年退職。理学博士。

学術会議への介入は 新たな戦前への序章

井上 和行さん

(信州大学名誉教授)

学術会議発足時の
理念に立ち返るべき

Q 今日の学術会議問題の本質は
どのようなことでしょうか？

1947年5月3日に施行された日本国憲法の前文には、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」とあります。また『平和』という言葉が繰り返し登場します。これは、明治期以降の日本の富国強兵政策が第2次世界大戦に繋がり、国全体を焦土と化す破局的な敗戦に導いたことへの痛切な反省を踏まえたものです。前文はさらに国民主権と平和主義を国是とする新生日本の再出発にあり、「人間相互の関係を支配する崇高な理想」を語

り、諸国民との協和により「国際社会において名誉ある地位を占めたい」という熱い願いを語っています。

49年に開催された日本学術会議の第1回総会では、「日本学術会議の発足にあたって科学者としての決意表明」という声明の中で、「我々は、これまでわが国の科学者がとりきつた態度について強く反省し、今後は、科学が文化国家ないし平和国家の基礎であるという確信の下に、わが国の平和的復興と人類の福祉増進のために貢献せんことを誓うものである」と宣言しています。これは日本国憲法前文の理念の下で、科学者自身も戦争遂行の国策に協力してきたことを反省し、科学者の社会的責任を果たすことへの決意表明です。

視野の広い研究者を
育てることも重要

Q 学術会議問題を体験的にほど
どのようにお考えですか？

ここでは、「確率論セミナー」に集う若手研究者の活動を支援し、直接選挙で学術会議会員にも選ばれた丸山儀四郎先生(1916年～86年)に纏わる思い出を紹介しています。

発足時からの《研究者による直接選挙方式》は、83年に《登録学術研究団体の推薦に基づく内閣総理大臣の任命方式》に変更され、さらに2005年に《現会員が次の会員を選ぶ方式》に変更されています。この流れは学術会議改革の結果ではあるが、一般の研究者

から見て学術会議や学術会議会員を疎遠な存在にしてしまったことも確かです。このような経過を考えると、今回の会員任命拒否問題に関する政府の説明も素直に受け入れることはできません。根本的な問題解決のためには、日本国憲法前文の理念と日本学術会議の発足当時に存在した《国民と科学者の間の契約の関係性》に立ち返り、国民の代表が集う国会において科学者の意見を丁寧に聴取すべきです。また科学者も国民に対して《研究活動と研究成果の利用を巡る危うい状況》について警鐘を乱打すべきです。

役割もあつたのですが、地方大学ではその機能も働かず苦勞した人も多かったです。職場には研究上で議論する相手もいなかった僕は、危機感を感じて《多彩な研究者との交流の場》に積極的に出掛けようと思いに決まりました。大学院に進学した時には「確率論セミナー」や「確率統計グループ(PSG)」の合宿形式の研究会にも参加しました。また科研費制度もなく費用は自分持ちですが、70年前後の大学紛争真只中の時代です。そこでは大学院生から30歳代の若手研究者までが立場や所属大学の違いを超えて、《確率論研究の将来展望》を巡って侃々諤々の議論をしたことが思い出されます。《研究とは何か》を教わり《数学研究の集団的取組》を体験できたのは幸運でした。春と秋の数学会の前後に開催されるシンポジウムではメインテーマを決めて議論しました。皆で共有すべき研究資料はセミナーノート・シリーズ「Seminar on Probability」として発行されました。伊藤清先生(1915年～2008年)の確率微分方程式の理論は今日では物理学や経済学の教科書にも登場します。その源泉となる論文は《Martingale過程ヲ定メル微分方程式》という題目で日米開戦直後の42年に「全国紙上数学談話会」に発表されています。59年の「確率論セミナー」の結成メンバーは30歳前後の若手研究者で、恩師の池田信行先生(1929年～2018年)も中心メンバーの一人です。彼らは、40年代からの確率論研究の新たな展開に関わってきた伊藤清先生

や丸山儀四郎先生を「確率論セミナー」の会員に迎え入れたのです。特に、丸山先生は東西対立で学術交流にも制約があつた60年代においてソ連の研究者との研究交流を提唱し、69年から始まる「日ソ確率統計シンポジウム」の相互開催の仕組みを実現させ日本側責任者を務めました。ちなみに91年の第6回シンポジウムはウクライナのキエフで開催されましたが、ソ連崩壊直前でキエフ市内は物資不足状態でした。そのとき、ウクライナ側の研究者が食糧切符を持ち寄り、ウクライナ民謡を歌って盛大な歓迎会を開いてくれたのです。日本側参加者はこの気持ちに込めるために、チェルノブイリ原発事故(86年)の被害者へのカンパを申し出ました。このような心のこもつた学術交流も95年に東京で開催された「第7回日露確率統計シンポジウム」で幕を閉じました。地方の大学で孤立している若手研究者に対して、他大学の研究者との交流機会を保障することや、諸外国との学術交流を通じて視野の広い研究者を育てることも学術会議の重要な役割だと思えます。

大きく変わった
国立大学の姿

Q 大学の在り方が大きく変わった事情についてお話し下さい。

ここでは、丸山先生が遭遇した《東京教育大学の筑波移転問題》、および僕自身が関わった《信州大学における助手の権利向上運動》を紹介し

【2面に続く】